千葉四十雀の自分史

村野　まもる

私どものチームの原点は、今から約三十五年前の第一回関東四十雀大会がその発祥と思っています。そのときのメンバーは今となっては佐藤操さんが残っているだけです。勿論当時新鋭の若き四十雀ウィングです。当然、五十雀、六十雀がエントリーしていたかもしれません。また、四十雀のみの参加だったかもしれません。それを確かめたことはありません。

私自身が参加したのは、今から二回前の下総の千葉県大会でした。

三十八歳の年で五十雀への参加でした。それ以来、今年の茨城大会まで延べ十八回もの大会を五十雀で参加しているわけです。過去の大会には、千葉県として六十雀のフルエントリーは、選手層の薄さから困難を極め、選手の知り合いの若い女性の応援をいただきながらの参加が数年前まで常識でした。それが今では、われわれのチームだけでも三十名を越す盛況です。それも、関東大会だけではなくいろいろな大会の参加を果たして、会員の皆さんで楽しんでおります。それもこれも、四十雀東京という良きライバルチーム事務局の猪鼻さんと知り合い、交流できたからにほかなりません。感謝です。

いつの頃からでしょうか、私がお世話役を仰せつかった当時から鍋島さんをチームのリーダー的存在として、千葉四十雀をシニアのクラブ組織として、さらに盛大に発展していきたいと考えるようになりました。その頃の選手名簿は約四十名足らずで、関東大会にエントリーするには絶対人数が足りませんでした。応援を頼むのもチームメイトの仕事でした。そんな状況が数年続いたものでした。それが、来年の千葉県大会は、市原八幡の芝生のグランドで各世代二チームのエントリーも視野に入れるほどの所属員の充実振りです。隔世の感があります。

それでも残念なこともありました。仕事の関係、体の不調、家族の介護そしてご本人の死による会員の退会です。しょうがないこととは言え、一抹の寂しさを感じます。事務局の引継ぎの会員名簿にその名を残しているのは私の感傷からかも知れません。良き友であったから削除できないでいるわけです。春一番の突風のように、数ヶ月参加した友もいました。数多くいました。それもそれで残念でたまりません。

これからも参加者が増えて、さらに盛会になっていくことでしょうが、これからも毎年歳を取っていき大好きなサッカーを死ぬまで続けて生きたいと願っている私として、ここで千葉四十雀の自分史的シナリオをご披露するわがままをお許しいただきたいと思います。

それはこうです。

・・・・仲間に楽しんでもらい、かつ、自分でも楽しむサッカーを続けるため、限りなく精進する。その時々にフォーザチームとは何かを考える。決してピッチ上だけではなく。

・・・・自分が貢献出来ることを絶えず捜す。使命感を持って。その上で次に続くメンバーを絶対的に信ずる。

・・・・メンバーはそれぞれ文化を持っている。それらを尊重する。

・・・・そして、自分史が終わるとき、仲間に語ってもらう・・・

ヘディングの強い、すごいストライカーだったと。マネージャーとしてではなく。合掌。

最後に、千葉四十雀のメンバーの皆さんには、それぞれに自分史があるはずです。もしサッカー日記をつけていれば、今日のスコアーは三対一で千葉四十雀の勝ち。得点者、自分二点、他のチームメイト一点。アシスト自分。・・・この繰り返し。そして、あなたの日記は決して虚偽ではないことは、仲間である我々がいつでもどこでも証言します。たとえ天国の神様の前でさえ。

平成十七年五十六歳の時